

上総国望陀郡大谷村における加持・祈祷

—— 雨乞・虫加持・疱瘡加持を中心に ——

山本光正

はじめに

一 雨乞

二 神楽

三 虫加持と疱瘡加持
おわりに

論文要旨

本稿は上総国の一農村（望陀郡大谷村現千葉県君津市）の生活を描き出そうとする試みの一つで、ここでは人の力の及ばぬ時の神仏への祈り、呪術的行為について述べた。右の行為の一端を明かにする素材として、本稿では雨乞・虫加持・疱瘡加持を取り上げた。天災と病氣に対する加持祈祷である。

大谷村は久留里藩領黒田氏の支配下にあったが、藩領全域に関わる雨乞は現在のところ近世後期のものが若干残る程度で、本稿は主として大谷村の名主の家に残る日記をもとに、幕末から近代にかけての雨乞と虫・疱瘡加持を追ってみた。

久留里藩領における雨乞は基本的には藩領各村が独自に行っていたようだが、その契機・核になったのは藩主の雨乞であった。大谷村の雨乞行事は若者組の神楽を中心に百万遍や村内・近隣社寺への参拝を行ったが、近代に至り藩主という核が失われると、「日の丸」の旗を揚げてみたりするなど、核となるもの象徴となるものを模索しているらしい行為を読みとることができる。一方神楽の舞や行事なども大きく変化している。当時流行していたと思われるものや村人が好ましいと受けとったものを積極的に取り入れている。この傾向は近世にもみられるが、

近代に入ってその変容は顕著になっている。その原因の一つとして行事が娯楽化してきたことにより、演じる側観る側共に、より面白いものを取り入れようとしたことがあるだろう。但しさらにその背景にあるものを考えていく必要がある。

虫加持・疱瘡加持に関しては、大谷村の持明院に独得の祈祷法または薬が伝わっていたらしく、村外の人々も加持を受けに来村している。村内に疱瘡加持があるにも拘わらず慶応元年村内に疱瘡が流行し子供達が感染すると、持明院の加持は無視され、若者組の神楽と疱瘡棚を中心とした祈祷が行われている。

天災・病氣いずれにしろ祈祷の中心をなすものは若者組による神楽であった。神楽は一時期中断したものの現在も行われているようであるが、その内容は前述のように近代に入ってから大きな変化を上げている。久留里藩領の村または久留里周辺地域の村々がどの程度神楽を行っていたか不明であるが、神楽が村落内における諸行事を見る上で大きな意味を持つと同時に、村内における秩序を維持するものとして機能していたことを窺うことができる。